



峡東の秋 雑感

山梨県教育委員会 峡東教育事務所 副所長 深澤 真人



副所長 深澤真人 氏

平成4年、小笠原小学校教諭として教壇に立つ。塩山南小学校・加納岩小学校教頭、義務教育課管理主事を経て、令和7年度から峡東教育事務所に勤務。趣味は、食寝遊の三楽道。

峡東の秋は静寂の中で深まっていく。澄んだ空気、色づく山々、風の音に混じって感じる命の気配。我が家のストーブの火入れはちょうど今時分。そんな季節に近年、クマの出没が相次ぐ。県内で人が襲われる事故も起き、自然の厳しさが私たちの暮らしに静かに迫ってきている。

クマは、山の実りが乏しい年に食を求めて人里へと下

りる。果樹や田畑の作物、大量の生ごみ——飢えた命にとっては最後の希望。人の営みが知らず知らずのうちに野生の命を引き寄せている。かつて「山」と「里」の間には境界があるとされていたが、それは自然のものではなく、人が作り出した認識の線にすぎない。その境界が曖昧になってきた今、人は不安を覚える。しかし、曖昧さは必ずしも悪いことではない。むしろ、自然との共存を考えるうえで、境界が揺らぐことは必要なことかもしれない。人が一方的に引いた線の内側だけで生きようとする限り、自然との対話は生まれないだろう。耕作放棄地が広がり、里山との関係が薄れ、かつて人と自然が交わっていた場所が静かに変わった。人が手放した場所に、かつての命の営みが息を吹き返している。脅威を感じると同時に、再び自然と向き合う機会でもある。

暖冬の影響も見逃せない。例年であれば12月には冬眠するはずのクマが、冬ごもりせずに動き回っていると猟師から聞いた。空腹も一因か。季節のリズムが崩れ、命の営みが揺らいでいる。自然の変化は静かに、しかし確実に私たちの暮らしにも影響を及ぼし始めた。地球規模

の大きなうねりの中で、私たちは自然との関係をどう築いていくべきなのか。

11月から始まる狩猟シーズンは、こうした状況に直接対応するものではない。狩猟は、文化的・歴史的・経済的背景を持ち、野生動物の個体数管理や人間の安全確保を目的とした制度である。その営みの中には命と向き合う重みがある。命を奪うことの責任、命を守ることの覚悟——それらは教育の根底にある問いとも重なる。

峡東のある小学校では、地域の猟師と連携し、動物の痕跡を観察する授業が行われている。子どもたちは、足跡の形や向きから、そこにいた命を想像する。「この足跡は昨日のものかな？」「何を食べたんだろう？」そんな問いを通して、自然と命に向き合っていく。その過程にこそ奥深い学びがある。

自然の中で育まれる問いは、単なる知識ではなく、感じる力を伴う。それは命の重さを知ることでもあり、自分が生きる世界の複雑さを受け止めることでもある。教育とはそうした問いを育てる営みであり、子どもたちが自らの足で世界を歩むための準備でもある。自然は時に優しく美しく、時に酷く厳しく私たちに問う。その問いにどう向き合うかが教育の営みであり、共存の知恵だ。自然を畏れ敬い、そして理解しようとする構えが、山梨の子どもたちの中に静かに根を張っていくと信じたい。

クマとの距離を考えることは、自然との距離を見つめ直すことでもある。そしてそれは、人間がこの地でどう生きていくかを、静かに問いかけているのではないだろうか。

その問いに、私たちは日々の暮らしの中で、少しずつ応えていけばいい。薪の蓄えは十分。冬間近。

本と人をつなぎと：子どもの世界が広がるメディア活用

【令和7年度 峡東地域 子育て講演会8月26日(火):山梨市民会館ホール】

講師：山梨大学大学院総合研究部教育学域教育学系 教授 秋山麻実 氏

8月26日(火)、山梨市民会館にて、山梨大学大学院 総合研究部 教育学域 教育学系教授・秋山麻実先生をお迎えし、「本と人をつなぎと：子どもの世界が広がるメディア活用」と題した講演会が開催されました。秋山先生は、長年にわたり児童文学や読書教育の研究に携わり、数多くの子どもや教育関係者と関わってこられました。当日は、学校関係者をはじめ、保護者や地域の皆様など多くの方々にご来場いただき、会場全体が熱心に耳を傾ける温かな雰囲気になりました。

1 本と子どもとの関わり

講演の冒頭で秋山先生は、「子どもと本との関わりは、大きく三つに分けることができます」と述べられました。その段階とは、「楽しむ」「知る」「表現する」の三つです。一つ目に、絵本や物語の世界に触れ、読むことそのものを楽しむ体験が重要です。二つ目に、本を通じて知識や情報を得たり、想像することで、子どもの視野は大きく広がっていきます。三つ目に、読書によって得た感情や考えを他者と共感したり、話し言葉、書き言葉、その他の芸術で伝えあったりする「表現」へとつながっていきます。これらは、子どもの権利として捉えられます。

講演では、実際の子どもたちによる読書活動や感想文の例を交えながら、一冊の本が子どもの心をどのように揺り動かすのかについて、秋山先生が具体的に語ってくださいました。

2 メディアの発達と子どもたち

続いて、現代社会を取り巻くメディア環境についてのお話がありました。スマートフォンやSNSの普及により、子どもたちはこれまで以上に多くの情報に触れるようになっていきます。これらのツールは、学びや交流の可能性を大きく広げる一方で、情報量が子どもの育ちに与える影響は、現実の経験とは異なります。メディアにおいては、情報量が多いとリアルにものごとが再現され、それ自体が興味をかき立てますが、想像の余地を減らします。一方、情報量を絞れば、現実の経験がもつにおいや危険、汚れ、湿度などのノイズが削除され、現実を生きるための経験的な学びの機会が減ります。また秋山先生は、「本は読み手にゆっくりと考える時間を与えるが、デジタルメディアは瞬時の反応を求める」と述べられ、発達と個人差に応じて活用することの重要性と、不足が人間の興味を準備することを強調されました。



秋山先生の熱心な講演

3 読書が育むもの

秋山先生はさらに、読書は単に知識を得るための手段ではなく、「他者とつながる力を育てる営み」とであると語られました。本を読むことで、登場人物の心情に寄り添い、異なる立場や考え方に共感する経験が得られます。こうした体験は、ことばの向こう側に生身の人間がいることへの想像力を育むとともに、他のメディアより多い余白や、有用でないことに触れることで、明日の考えや行動の創造へとつながっていきます。また、一緒に本を読んだり、感想を友人や家族と語り合ったりすることは、子どもの表現力を養うだけでなく、他者との関係を築く大切な場となることも、先生は指摘されました。



画面表示や本を提示して
興味深い内容がづく

4 講演を通して感じたこと

参加された保護者の方々からは、「家庭でも読書の時間をもっと大切にしたい」「スマートフォンとの付き合い方を子どもと一緒に考えたい」といった声が多く寄せられました。また、他の参加者からは「本を読むことが、自分の考えをつくることにつながると知った」「SNSを使うときに、相手の気持ちを考えるようにしたい」といった感想も聞かれました。こうした感想からも、今回の講演が、学校関係者、行政、保護者など、さまざまな立場の方々にとって、本やメディアとの関わり方を見直す良い機会となったことがうかがえます。

5 まとめ

本と人との出会いは、子どもにとって自己を成長させ、他者とつながり、社会と関わっていくための大切な糧となります。一方で、デジタルメディアの存在は、現代の子どもたちにとって避けて通れない現実でもあります。今回の講演を通じて、私たちは改めて「読書とメディアの両方を、どのように生かしていくか」を考える必要性を共有することができました。

秋山先生が示された数々の事例と提言は、今後の子どもたちの成長を支えるうえで、大きな道しるべとなることでしょう。



峡地連副会長からのお礼

みんなで楽しむ本の世界 ～絵本読み聞かせ～

【甲州市立奥野田小学校】

9月3日（水）8時20分から20分間、甲州市学校支援地域ボランティア「甘草屋敷子ども図書館絵本くらぶ」の読み聞かせボランティア6名が来校し、各学年教室で絵本を読み聞かせました。

ボランティアの方々は、学年に応じたテーマを設定し、児童の興味や理解に合わせた絵本を選んで進めていました。低学年では、聞き慣れない言葉を丁寧に説明したり、対話を交えたりするなど、子どもたちが物語の世界に引き込まれる工夫が見られました。学年が上がるにつれ、環境問題や平和などを題材とした絵本を通して、子どもたち自身の考えを深める活動も行われ、宮沢賢治の作品などにも触れながら、絵本の奥深さを感じる時間となりました。

児童からは「絵本も楽しい」「もっと読んでほしい」といった声が聞かれ、ボランティアの方々も「発想力が素晴らしい」と子どもたちの反応に感心していました。この活動は市内の他の小学校でも継続的に実施されています。



絵本の世界にのめり込む



絵から得られる地域も多い

親子でふれあう絵本の時間 ～ちびっこおはなし会～

【甘草屋敷】



絵本の楽しさが溢れる



親子の触れ合いも深まる

9月4日（木）の午前、甲州市の塩山駅北口正面にある甘草屋敷にて、「甘草屋敷子ども図書館絵本くらぶ」による「ちびっこおはなし会」が開催されました。絵本くらぶは地域のボランティアによって運営されており、2002年の甘草屋敷開館とともに活動を開始し、今年で23年を迎えます。当日は0歳児2名、3歳児1名とその保護者が参加しました。

絵本くらぶのメンバーが、やさしく語りかけながら絵本の読み聞かせを行い、わらべうた・手遊びも取り入れられ、終始和やかな雰囲気の中で進行了。また、ボランティアによる絵本の紹介や子育て・読み聞かせのアドバイスもあり、地域で子育てを支える温かさを感じられる場となりました。

ちびっこおはなし会は月に1回開催されているほか、甲州市内の小学校での朝読書活動も行われています。おはなし会の詳細については甲州市の広報に掲載されています。

トヨタ自動車 ～オンライン授業～

【笛吹市立春日居小学校】

10月2日（木）、春日居小学校の5年生を対象に、トヨタ自動車による「オンライン授業」が行われました。案内役を務めるトヨタのスタッフが実際に来校するのではなく、インターネットを通じて学校とつながるオンライン形式で実施されます。

社会科学習とリンクした内容

授業は社会科「自動車の生産」に関連し、自動車産業や工場の工夫、最先端の技術などについて学ぶ内容でした。児童たちはワークシートにメモを取りながら、案内スタッフの丁寧な説明を聞き、日本の自動車生産台数や働く人の数などにも驚きの声をあげていました。

映像で工場見学 リアルな臨場感

動画を通じて工場の内部を見学する場面では、実際にその場にいるかのような臨場感を味わいました。自動車が組み立てられる工程や、ロボットが正確に部品を取り付ける様子に、児童たちは興味津々。最新技術を活用した車の紹介では、「絶対欲しい!」という声もあがりました。

働くことと学ぶことのつながり

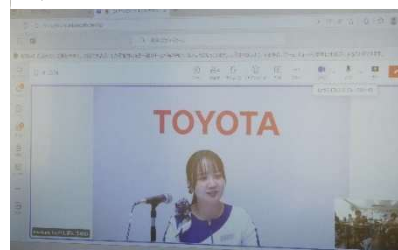
実際に働く人の声を聞く中で、児童たちは「今学んでいることが将来の仕事につながる」ことを実感しました。質問コーナーでは、「空飛ぶ車はいつできますか?」といった未来への関心が高い質問もあり、案内スタッフが一つひとつ丁寧に答えてくれました。児童たちの目は未来への期待で輝いていました。

ICTで広がる学びの場

このようなリモート授業は、近年、多くの学校で実施されています。ICTの活用によって、遠く離れた専門家と直接つながり、リアルな学びを体験できる機会が増えています。子どもたちの興味や視野を広げる、これからの学びの形が確実に広がっています。



案内スタッフとの活発なやり取り



児童みんなに目を配る案内スタッフ



案内スタッフとの会話もリアルタイムに実現

わたしの学校はここにあるプロジェクト ～測量出前授業～

【山梨市立岩手小学校】

9月16日（火）、山梨市立岩手小学校で、県測量設計業協会による「測量出前授業」が行われ、5・6年生11名が参加しました。授業は、教室での講義と歩測による体験、そしてグラウンドでの最新測量機器「ドローン」操作体験、最後に全校生徒でドローンによる記念撮影が実施されました。

測量の歴史としくみを学ぶ

教室では「測量とは何か」をテーマに、地図作成や位置を正確に測るための技術としての測量の役割について学びました。伊能忠敬による日本の測量の始まりや、現在の測量技術の発展など、歴史的な流れにも触れました。また、歩測体験では、自分の歩幅を使って距離を測る体験を行い、数値としての「距離」を体感的に理解することができました。

グラウンドでの体験で理解を深める



新たに設置された測量杭を確認

日本の測地系が「日本測地系」から「世界測地系」に変わったことで、地球全体を基準とした位置の測定が可能になったことも説明されました。校内グラウンドにあるこれまであった測量点も新たに「世界測地系」として設置されました。児童はグラウンドで実際の測量点を確認し、新たに設置された測量点をもとにこれまでの測量点との位置の違いを確認しました。



ドローン操作体験

さらに、最新の測量技術としてドローンの操作体験を行いました。児童たちは実際に操縦しながら、空から地形を測る仕組みを学びました。「ドローン操作は予想より簡単で楽しかった」「慣れない操作だったけれど、うまくできてうれしかった」など、体験を通して興奮と喜びの声が聞かれました。

学びを通して広がる興味

社会科で緯度や経度を学習してきた児童にとって、実際の測量体験は学びの理解を深める貴重な機会となりました。自分たちの学校の「正確な位置」を知

ることを通じて、測量の専門的な仕事や技術の重要性を感じ、身の回りにあるさまざまなものへの関心を高める時間となりました。



ドローンからの撮影

峡東地域 中学校新人体育大会 団体の部(優勝校)

令和7年度の「中学校新人体育大会」が10月2日に東山梨地区、10日に笛吹市でそれぞれ開催されました。いよいよ1・2年生が部活動の中心になり、本格始動です。

種 目	東山梨地区		笛吹地区	
	男子	女子	男子	女子
野 球	塩山・山梨北		石和	
サッカー	山梨南		浅川	
ソフトボール	塩山		—	
バスケットボール	塩山	塩山	浅川・御坂	浅川
バレーボール	塩山	山梨北	御坂	浅川
卓 球	山梨南	山梨南	春日居	浅川
ソフトテニス	山梨南	山梨北	浅川	浅川
剣 道	山梨北	勝沼	浅川	—
ハンドボール	山梨北	塩山	—	—
弓 道	—	—	石和B	石和A



◇「優秀賞・優良賞」（峡東地域内）のみを掲載します。

◇ 詳細は県 HP「第 18 回ふるさと山梨郷土学習コンクール」をご覧ください。

小学校

ふるさと山梨優良賞（推進委員長賞）	八幡小	古屋 蘭さん・古屋 蓮さん
ふるさと山梨優良賞（推進委員長賞）	八幡小	関口 悠笑さん
ふるさと山梨優良賞（推進委員長賞）	加納岩小	三澤 穰さん
ふるさと山梨優良賞（推進委員長賞）	石和北小	原田 栞那さん
ふるさと山梨優良賞（推進委員長賞）	石和北小	松岡 璃奈さん

中学校

ふるさと山梨優良賞（推進委員長賞）	山梨南中	野阪 瑠那さん
ふるさと山梨優良賞（推進委員長賞）	塩山中	永関 玄晟さん
ふるさと山梨優良賞（推進委員長賞）	塩山中	清水 美空さん
ふるさと山梨優良賞（推進委員長賞）	山梨北中	堀込 悠真さん

地域に貢献し、地域を盛り立てる ～かつぬまぶどう祭り～

【甲州市立勝沼中学校】

鳥居焼きの準備に全校生徒が参加

9月14日（日）、「勝沼ぶどう祭り」で行われる伝統行事・鳥居焼きの準備に全校生徒で参加しました。朝7時に集合した生徒たちは、地域ボランティアや市職員とともに柏尾山の急斜面を登り、薪の設置作業を行



地域の方の指示を受けながら作業が進む



急斜面での作業が続く

いました。ボランティアの方から「この火を灯すことは、これまでに亡くなった人や物への供養の意味があり、それぞれの思いを薪に託している」と説明を受け、生徒は自分たちが設置した薪に静かに手を合わせました。地域の伝統に触れながら、心を込めて作業に取り組む姿が印象的でした。



祭りのクライマックスの鳥居焼きは、多くの人に感動を与えた

祭りのクライマックス・鳥居焼き

10月4日（土）には、勝沼ぶどう祭りが盛大に開催されました。この祭りは、ぶどうの実りと収穫の喜びを祝い、ぶどうとワインの歴史を築いてきた先人への感謝を表すものです。当日も多くの人が訪れ、勝沼の魅力が広く発信されました。

祭りのフィナーレを飾るのは、伝統の「鳥居焼き」です。大善寺の護摩法要で採火された聖火は、勝沼中学校の生徒で構成された「聖火隊」によって勝沼町内を巡ります。勝沼中央公園会場では、集まった多くの観客の前で出発セレモニーが行われ、大きな拍手と歓声の中、生徒たちは柏尾山へと向かいました。



中学生の堂々とした姿は地域の誇り

地域の誇りを胸に

夜空を焦がす鳥居焼きの炎は、勝沼の秋の風物詩として多くの人々の心に刻まれています。護摩木に次々と点火されていく様子を見守りながら、観客の目には感動の涙も見られました。地域の伝統を支え、感動を与える生徒たちの姿は、まさに地域の誇りです。今回の活動を通して、生徒たちは「地域に貢献することの尊さ」と「自分たちが地域の一員であることの喜び」を実感する貴重な機会となりました。

日本初開催！東京2025デフリンピック ～11月15日開幕・世界が注目する記念大会～

11月15日、いよいよ日本で初めての「東京2025デフリンピック」が開幕します。競技は11月14日から26日までの13日間にわたり、全21競技が行われます。テレビやインターネットでも観戦可能です。世界のトップアスリートたちの熱い戦いを、ぜひ応援してください。

◎デフリンピックとは

デフリンピックとは、「Deaf（耳が聞こえない）」＋「Olympic（オリンピック）」を合わせた言葉で、聴覚に障害のある人々による国際的なスポーツ大会です。1924年にフランス・パリで第1回大会が開催され、2025年の東京大会は記念すべき100周年の節目となります。参加選手は、補聴器などを外した状態で最も小さな音が55デシベル（通常の会話が聞こえない程度）以上の聴覚障害があることなどが条件です。競技のスタートや笛の合図などは、音ではなく光や旗で伝えるなど、視覚を活かした工夫が施されています。

◎聞こえないからこそ、見える世界がある

耳にはバランスを取る大切な役割があり、聴覚に障害のある人にとってスポーツは一層の挑戦となります。しかし、選手たちは互いにサインで意思を伝え、工夫しながら高いレベルの競技を行っています。デフリンピックは、聞こえる人と聞こえない人の間にある「目に見えない壁」をなくす大きな一歩となる大会です。



ろう学校全校で行われた壮行会

夢に向かって挑戦 ～東京2025デフリンピック出場選手と交流～

【県立ろう学校】

柔道日本代表・佐藤正樹選手

9月16日（火）、県立ろう学校に柔道男子66キログラム級・日本代表の佐藤正樹選手が来校しました。佐藤選手は同校幼稚部の修了生で、幼いころから柔道に打ち込み、2022年デフリンピックで5位入賞、2023年の世界選手権では見事優勝を果たしたトップアスリートです。

交流会では、幼稚部と小学部の幼児・児童に柔道の受け身や投げ技を優しく指導しながら、自身の経験を語りました。「努力を続けることが大切」「失敗から学ぶ勇気をもってほしい」との言葉に、子どもたちは真剣なまなざしで聞き入っていました。講演後の壮行会では、幼児・児童・生徒全員が「メダルをつかみ取れ！」と元気いっぱいにエールを送り、佐藤選手は「金メダルを目指して頑張ります。みんなの応援が力になります」と笑顔で応えました。



柔道着は破れない！を体験



子どもたちが佐藤選手を投げる

自転車競技日本代表・藤本六三志選手



選手の話にワクワクする



競技用自転車の軽さを体験

9月24日（水）には、自転車競技の日本代表・藤本六三志選手が中学部・高等部の生徒と交流しました。藤本選手は都留市在住で、本格的に自転車競技を始めてわずか1年4ヶ月ほどで日本代表入りを果たした努力家です。

講演では「失敗を恐れず、そこから次につなげることが成長につながる」と語り、生徒たちに前向きに挑戦する大切さを伝えました。また、自身の競技用自転車を持参し、実際にその軽さやギアの仕組みを体験させる場面もあり、生徒たちは目を輝かせていました。壮行会では「金メダルをとれるように応援します！」という声があがり、藤本選手は「楽しみながら頑張ります。応援が力になります」と感謝の言葉を述べました。

東京2025デフリンピックは、聞こえない人の可能性を広く伝える記念すべき舞台です。県立ろう学校の児童・生徒も実際に東京の会場で応援し、日本代表選手たちの背中を押します。スポーツの力が、誰もが輝ける社会への一歩となることを願っています。

男子卓球日本代表・亀澤史憲選手

卓球男子の日本代表・亀澤史憲選手は、中学1年時にろう学校で卓球をはじめました。高等部在籍中には、関東聾学校卓球大会および全国聾学校卓球大会において、男子団体・個人で優勝を重ねるなど、毎年安定した成績を収めました。高校3年時には、全国ろうあ者卓球選手権で5位入賞を果たしています。昨年11月には、亀澤選手が来校し、交流会が実施され卓球を直接教えてもらい、貴重な経験となりました。

ろう学校に関係する3選手が、日本代表として東京2025デフリンピックに出場します。みんなで応援しましょう！